

清水義範
日本語の乱れ



集英社

日本語の乱れ
清水義範

集英社

清水義範 (しみず・よしのり)

1947年名古屋生まれ。愛知教育大卒。81年『昭和御前試合』でデビュー。88年『国語入試問題必勝法』で吉川英治文学新人賞を受賞。『蕎麦ときしめん』『永遠のジャック&ベティ』でパステイッシュ文学の第一人者となる。

他に『迷宮』『おもしろくても理科』『どころんでも社会科』『日本語必笑講座』『みんな家族』『八つの顔を持つ男』など著書多数。



にほんご みだ 日本語の乱れ

二〇〇〇年十一月三〇日 第一刷発行

著者 ◆ 清水義範 (しみず・よしのり)

発行者 ◆ 谷山尚義

発行所 ◆ 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇 千一〇一八〇五〇

〇〇三—三三三〇—六一〇〇 (編集部)

三三三〇—六三九三 (販売部)

三三三〇—六〇八〇 (制作部)

印刷所 ◆ 凸版印刷株式会社

製本所 ◆ 株式会社石毛製本所

©2000 Yoshinori Shimizu, Printed in Japan

ISBN4-08-774498-1 C0093

JASRAC 出 0013425-001

定価はカバーに表示しております。

追本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁(本のページ順序の間違いや抜け落ち)の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して本社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものに付いてはお取り替え出来ません。
本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

日本語の乱れ

もくじ

日本語の乱れ
7

場所か人か
27

たとえて言うならば
47

耳の言葉、目の言葉
69

花の名前
93

伝言ゲーム
115

題名に困る話 ————— 139

侃侃諤諤 かんかんがくがく ————— 161

宮事記 ————— 183

絵のない絵日記 ————— 203

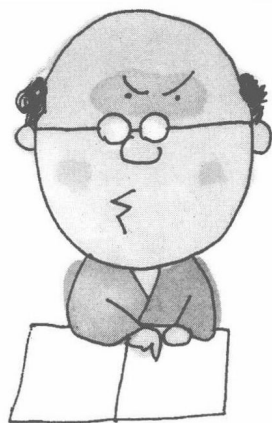
二〇〇一年宇宙の恥 ————— 225

学習の手引き ————— 247

装幀・本文カット 南伸坊

日
本
語
の
乱
れ

日本語の乱れ



「すごい反響ですよ。投書が山のように来てます」

と、ディレクターの岡野に言われ、初めは何のことだかわからなかった。

「投書って？」

松本真太郎はミーティング・ルームの椅子にかけてそう言った。

「例のほら、日本語の乱れですよ。間違った言葉づかい、気になる言い方を送って下さいってやつ」

「ああ、あれね。反響あったの？」

「あったなんてもんじゃない。すぐにお便りがどかどか来ちゃって、こんなこと番組始まって以来ですよ」

松本真太郎は俳優である。そんなに売れているほうではないが、声がいいのでよくナレーションの仕事をしている。その関連で、日曜日の午前十時から二時間のラジオ番組も持っていた。雑談風に肩のこらないおしゃべりをし、そのあい間に音楽を流すという『サンデー談話室』という番組で、始まってもう三年になる。今年四十歳になった松本の落ちついた話しぶりが、

幅広い世代の聴取者にうけていた。

先週の放送の中で、松本は言葉づかいについて、思うことをいくつか話したのだ。日本語がどんどん乱れていってますねえ、と。「見れる」「食べれる」というラ抜き言葉も話題になっているし、女子高校生は「チョベリグ」とか「超MM」などの意味不明の流行語を作るし、このままでは日本語はどうなってしまうんでしょう、なんて発言をしたのである。

そして、聴取者の皆さんにも、気になる日本語の乱れはいくつかあるでしょう、それを番組あてに送って下さい、と提案した。ひとつずつ番組で取りあげ、考えていきたいと思います、とやったのだ。

そうしたら、予想を上回る量の投書が来たのである。

岡野が、段ボール箱に入った投書を運んできて、ミーティング・ルームの机の上に広げた。葉書もあり、封書もあり、ぎっと百通近くありそうだ。一週間で集った量としては異例の多さである。

「どんなのが来てるんだろう」

と言いながら、松本は手近にあったものに手をのばす。

「もちろん、同じようなのが重なってます。ラ抜き言葉はけしからん、というのが十通ぐらいありましたしね」

「こっちが言ったことへの反応だね。そういうのは多いだろうな」

まず手にとった一通のお便りは、こういうものであった。

「言葉の乱れという事で思うことはたくさんあるが、そのうちのひとつ。『繋ぐ』という正しい言葉があるのに、近頃は多くの人が『繋げる』というヘンな言葉を使うので大変気になる。アナウンサーまでが『糸と糸を繋げる』なんて言っており、なげかわしく思う。『繋がる』という自動詞はちゃんとした日本語にあるが、どう活用させていいのかもわからないような『繋げる』は日本語ではない」

山梨県に住む八十二歳の男性からの投書だった。

「そうか。『繋げる』はおかしいのか。言われてみれば『繋ぐ』が正しいなあ」

どういうことですか、と投書をのぞきこんで岡野が言う。

「ああ、それですね。でも、電話回線を繋げる、とか言いますよね」

「言うけど、それも繋ぐ、でいいわけだよ。手を繋ぐ、だろ。手を繋げる、とは言わないもの」

「そう言えば、同じ内容の投書がほかにもありましたよ。そっちのほうが詳しく書いてあったと思うけど」

と、投書をひっかきまわして、岡野はそれをさがしあてた。便箋五枚にも及ぶ長い手紙だったが、要点をまとめると次のようなことが書かれていた。

『『繋げる』という言葉は昭和五十年頃から耳にするようになった気がする。近頃では放送の中でさえ使われており、驚くばかりだ。思うに、『繋げる』は、繋ぐことができる、という可能を表す『繋げられる』が短くなったものであろう。似た言葉としては『泳げる』というのが

ある。しかし、『泳げる』は泳ぐことができる、という意味だけに使われていて、泳ぐこと自体を『泳げる』とは言わない。なのに、『繋ぐ』こと自体を『繋げる』と言う人がいるのは、やっぱりおかしいのである」

千葉県に住む七十四歳の男性からの投書だった。

「しかし、よくこれに気がついたよなあ」

と松本は言った。

「たったひとつの例で感心してちゃ早いですよ。そういうのがこんなにも来ちゃってるんですから。言葉の乱れについて一言言いたいという人はものすごくいるんですね」

2

まさしくその通りである。

松本の番組自体は日曜日の昼前の放送ということで、聴取者の幅が広いはずである。男女を問わず、若者から老人にまでまんべんなく聴かれている。日曜だからサラリーマン層も聴取できる。

なのに、投書をしてくる人たちというのは片寄っていた。男対女の比が、八対二、というところである。そして男女とも、六十歳以上の老人が半数以上なのだ。年齢が書いてない手紙も多くあるのだが、文字のくずし具合や、文面から、老人だろうなと思われるものが多い。

そういう、関東一円のお年寄りが、日本語の乱れ、というテーマだと即座に反応し、これもある、あれもけしからんと、言いつのるような状況になるのである。

もちろん、その中には、最近よく耳にする話題のテーマのものも多い。ラ抜き言葉の問題は、その中で最も有名だが、そのほかにも、

「若い人がカタカナ語を、すべて平板なアクセントにしてしまうのがおかしい。たとえば、オートバイのことをいうバイクを、俳句と同じアクセントにしてしまうような例である」

「若い人の、半疑問のしゃべり方は気にさわる。『きのう？ コンビニ？』とか行って？ 弁当？ 買ったのよ」と、いちいち語尾を上げる言い方である」

などを気にする年配層はかなりいるのだ。

そこに苦言を呈するのがはやりだから言っている、ような気がしなくもない。

ところが、それには気がついていなかったなあとと思うような、意外なことも老人たちは指摘してくるのだ。

「『電話を入れる』という言葉を使う人がいるが、電話は入れるものではなく、かけるものである。あれは新聞記者などが、『社に一報を入れる』というところから転用された言い方だろうが、『電話をかける』が正しい」東京都 男性 五十三歳。

「『すごい』という言葉が濫発すること自体、語彙が貧困だが、この形容詞を副詞風に使う時『すごい美しい』とか『すごいおいしい』などのように言う人がいてあきれる。『すごく美しい』『すごくおいしい』でなければならないことは言うまでもない」東京都 男性 六十五歳。

『『ものすごい』とは、本来、とてもおそろしい、ゾツとするような、という意味の言葉で、そこから程度のはなはだしさを表すようになったわけです。だから、『ものすごく楽しい』などど、よいことを言う時に使うのはヘンです』埼玉県 女性 七十二歳。

「きくたびにいやな気分になるいちばん嫌いな言葉が『生きざま』である。本来、『死にざま』という言葉はあるが、『生きざま』なんて言葉はない。そして、『死にざま』は、みじめな死にざま、とか、あの死にざまを見ろ、というように、よくない死にかたを表す言葉である。なのに、誤って作った『生きざま』という言葉が、あの人の生きざまに学びたい、などとよい意味に使われることが多いのは、二重に間違っている」神奈川県 男性 六十歳。

「ニュースで、『誘拐された可能性もあり……』ということを書いていたが、可能性とは、それが可能だという度合いのこと、うまくいく率、ということだ。だから悪いことを予想した時に可能性というのは変だ。誘拐されたのかもしれない時は、そのおそれもあり、であろう」東京都 男性 四十三歳。

『『やっぱり』という言葉で『やっぱり』と言う若い人が増えてきた。バカである。それを短くして『やっぱ』と言う者までいる。大バカである」千葉県 男性 七十九歳。

「たとえば商店で物を買う。その時に店側としては『ありがとうございます』である。その客が店を出ていく時には、『ありがとうございました』であろう。それなのに、礼を言うべきことをしてもらって、いきなり『ありがとうございました』と言う者がいる。今現在の感謝を過去形で言うな」東京都 男性 六十六歳。

「ニュースを視ていたら、優勝したチームの監督にマイクを向けて、『おめでとうございました』と過去形で言っていた。優勝したその日のうちで、胴上げの直後である。『おめでとうございます』と現在形で言うべきであろう」栃木県 男性 六十二歳。

「テレビで、番組が終る時『では失礼します』と言っていた。『失礼します』は、これから番組が始まる時に言う言葉であろう。高校生ぐらいの若者が他人の家にあがる時に、『失礼します』と言うのであり、帰る時には『失礼しました』であろう。思うにそのアナウンサーは、『どうも失礼しました。それではおいとま（お別れ）します』と言いたかったのであり、それをこっちゃんにして『失礼します』になったものらしい。日本語の時制を乱さないでもらいたい」茨城県 男性 五十四歳。

3

「しかしまあ、いろんなことを言ってくるものだよなあ」

と松本はため息まじりに言った。読んでいるうちに、ちょっとうんざりしてしまったのだ。

「えっ、と思うような意外な指摘のものがあるでしょう。その言い方って間違ってたの、知らなかったなあ、と思うような」

「あるある。これが間違いだとしたら、私もずっと間違ってたまま使っていたぞ、と思うようなね」